IoT活用でスマートファクトリーに貢献
印刷・製本管理システム提供
ピー・エス・シー

印刷・製本業界向けの各種業務管理システムを開発・販売するピー・エス・シー㈱（本社／東京都足立区、原田敏明社長）は、「ITで経営を見える化」を製品開発方針に掲げ、日進月歩でシステム改良を進めている。そして同社はこのほど、印刷業向け業務管理システムを「刷衛門（スリエモン）」、製本業向け業務管理システムを「綴之介（トジノスケ）」として名称変更し、販売を開始した。

管理システム名を「刷衛門」／「綴之介」に変更

同社は、これまでに延べ150システム以上を業界に提供している。原田社長は「経営をIT管理することで隠れていた数値が見えるようになり、経営課題を分析する重要な資料となる。また、事務作業を一元管理することにより、省力化と現場の生産性向上にもつながる」と経営をIT管理する重要性とメリットについて話す。特注対応と低価格で差別化を図っており、初期導入コスト250万円から、保守費用1万円／月からで導入可能となっている。ただし、小規模システム（クライアント数台以下）の場合は、刷衛門／綴之介とも機能限定のLiteバージョン50万円からで導入可能となっている。

同社はもともと、製本業界向けに特化したシステム開発で信頼を築いてきた企業。製本業向け業務管理システム「綴之介」は、こうした製本業界のことを知り尽くしている企業が開発したシステムとして業界から高く評価されており、製本業界でシェアナンバーワンの120システム以上の納入実績を誇っている。

一元管理により事務作業の省力化と現場の生産性向上を実現

同社のシステムは、標準システムでは見積りから受発注、販売管理、請求書、指示書発行、売り掛け管理などの一元管理が可能。オプションで「進捗管理」などの生産管理システムを搭載できる。

原田社長は事務処理作業を一元管理するメリットについて「印刷業界は業界としてはIT化が進んでいるが、事務処理作業については部門ごとにファイルメーカーやエクセルなど個別のシステムを使うなど合理化されていない会社が以外と多い。これらを一元管理することにより、二次入力、三次入力などの無駄を省き、省力化を実現できる」と説明する。

また、原田社長はITシステムの活用は製造現場の生産性向上にもつながると指摘する。

「バーコード管理することにより、日報を書く手間を省くことができる。受注番号、工程番号、機械番号、担当者番号などをバーコード管理することで、リアルタイムで進捗状況を把握することができ、日報と同じものを作成できる。省力化した時間を多能工化することで、工場全体の生産性向上につなげることができる」（原田社長）

同社システムの便利な機能としては、「資料ボックス」が標準システムとして搭載されている。これは案件ごと、受注番号ごとにワード／エクセル／イラストレーターなどのようなファイルでも入れることができるフォルダ。後々に検索したときに関連資料がすべて出てくるため、ユーザーからは便利な機能だと高い評価を得ているようだ。

「中小の印刷、製本業界ではいまだに指示書や発注書などをFAXでやり取りしている企業も多い。これらの入力情報を含めてすべて『資料ボックス』に入れておくことで、トレーサビリティーにも役立てることができる」（原田社長）

WEB 工程管理画面

営業先からの「見積り作成機能」を実現

原田社長は、経営をIT管理することの真の目的は資料作りではなく分析することにあると強調する。これにより各部門の生産性を向上させ、会社全体の生産性向上にもつなげていくことを理想としている。

印刷業界は見積りが細かくなることが多いため、営業先においてその場で見積りを出すことがなかなか難しい。納期短縮が求められる中、見積りを会社に持ち帰ってから作成して出すことで仕事が遅れれば、受注のチャンスを逃すことにもつながりかねない。

そのような中、同社のシステムは、営業先から見積り作成が可能。営業先から進捗状況を確認できるシステムはすでに開発済みだが、同機能を活用すれば、シンプルな見積りを営業先で出すことができるため、営業活動の大幅な効率化を図ることができる。

IoTを活用した開発を進める同社は、将来的には折り機などについても「Beacon」を活用してカウントする機能を付加していく構想もあるという。スマートファクトリーの実現に向けて、同システムの導入は一考の価値がありそうだ。